

## 研究課題別評価

### 1 研究課題名: 多体量子系としての量子計算機の分析

### 2 研究者氏名: 清水 明

### 3 研究のねらい:

量子計算機と古典計算機の性能の差が顕著に出るのは、大きなデータを扱うときであるから [1]、意味のある量子計算機には多くの量子状態が必要である。これを実現するための物理系は、原理的には多準位の1自由度系(たとえば1個の水素原子)でも構わないのだが、様々な要素を勘案すると、少数の準位を持つ系(たとえば2準位系=キュービット)が空間的に広がって配置されている系を想定するのが自然である。つまり、量子計算機の物理的実態は、多体量子系と考えるのが自然である。

量子計算機にはエンタングルメントが現れるが、上記のような多体量子系のエンタングルメントは、量子情報理論で言うところの「多地点のエンタングルメント」になるので、「2地点のエンタングルメント」とは違って、無数の種類がある。その中のどんな種類のエンタングルメントが、量子計算機の(古典計算機に比べての)スピードアップに本質的な役割を演じているのかはよくわかっていない。

この基本的な問題に対して、筆者は次のような予想を発表した(正確な表現は[9]に記した)[2]: ある計算問題を古典計算機よりもずっと速く解くような量子計算機は、マクロに異なる状態たちの重ね合わせ(これを筆者はマクロにエンタングルした状態と呼んでいる)を計算の途中に使うのであろう。そしてそれが量子計算機のスピードアップに本質的な役割を演じているのであろう。

本研究の目的は、この予想の真偽を調べて上記の基本的な問いかけに解答を与えることと、多体量子系のマクロエンタングルメントの物理を明らかにすることにある。そもそも、「マクロに異なる状態たちの重ね合わせ」という概念自体が曖昧なものであったが、これについてもきちんとした定義を与え、その物理を調べる。

### 4 研究成果:

多体量子系の「マクロに異なる状態たちの重ね合わせ」を最初に問題にしたのは、シュレディンガーであった [3]。それ以来このような状態は多くの人々の興味を引き、今日までずっと研究が続いている。最初のうちは、現実の物理とは結びつきにくいような議論がなされることも少なくなかったが、1980 年前後から、A. J. Leggett の有名な Leggett プログラム[4] のように、現実の物理の問題として論じられるようになってきた。しかしながら、「マクロに異なる状態たちの重ね合わせ」の定義からして曖昧なものであり、それを明確化しようとして Leggett が導入した disconnectivity という量も(Leggett 自身も述べているように)不定性の大きな曖昧な量になってしまっていた。また、「そのような状態はノイズにより極めて速くデコヒーするであろう」という予想をきちんと示そうという仕事も多くのグループ(例えば Zurek ら)により試みられ、確かにそれを示したと主張されたが、実際には少数自由度系のモデルを採用したために、環境との相互作用のモデルを取り替えると答えが簡単に変わってしまうような有様だった。それでは何も示せていないし、後述のように、実はこの予想は一般には正しくない。

そこで筆者らは、本研究課題が採択される前に、まず次のような内容の一般論を構築した [5]:

- (i) 多体量子系の純粋状態について、「マクロに異なる状態たちの重ね合わせ」を曖昧さなく定義し、そのような状態(「マクロにエンタングルした状態」と呼んだ)を  $p=2$  として示す指標  $p$  ( $1 \leq p \leq 2$ )を導入した。
- (ii)  $p=1$  の状態のデコヒーレンス・レートは、決して異常に大きくなることはないことを、環境との相互作用のモデルの詳細に依らずに一般的に示した。
- (iii)  $p=2$  の状態のデコヒーレンス・レートは、環境の性質に依存して、異常に大きくなることも

あればそうでないこともある(マクロにエンタングルした状態は、ノイズに対して格別に不安定というわけでは、必ずしもない)。

(iv) しかし、 $p=2$  の状態は、適当な局所的な測定に対しては不安定である(状態を大きく変えるような局所測定が常に存在する)。

これは一般論であるから、様々な多体量子系に応用できる。そこで、量子計算機への応用として、上述の予想を発表した。そして、この予想の真偽を調べる第一段階として、Shor の因数分解アルゴリズムにおいて確かにこの予想が真であることを確かめることができた [6]。

しかしながら、次のような多くの課題が残っていた：

1. 因数分解はいわゆる構造のある問題 [1]であるが、構造のない問題を解くときにも予想は真なのか。
2. 文献[6]の段階では、一般の純粋状態について指標  $p$  を計算する方法が見つかっていなかったために、手探りで調べて、計算ステップの中の2カ所について、マクロにエンタングルした状態が現れることを示しただけだった。他のステップではどうなっているのか。
3.  $p$  という指標は、純粋状態にしか使えない。一般の状態(混合状態)ではどのような指標を用いればよいのか。
4. マクロにエンタングルした状態を実験的に検出するには何を測ればよいのか。
5. 量子計算機以外の多体量子系には、マクロにエンタングルした状態は、いつどのようなときに現れるのか。

そこで本研究課題では、次のような方法でこれらの課題を克服していった。まず、一般の純粋状態について指標  $p$  を計算する方法を開発した。大きな自由度の多体量子系にこの方法を適用するには大量のメモリーを積んだ高速の計算機が必要となるので、それを何台か購入し、数値計算を実行した。また、特殊な場合には手計算でも  $p$  が計算できる場合があるので、その場合は手計算を行った。これにより、1, 2, 5の研究を遂行することができた。また、様々なアイデアを試行錯誤し、時には数値計算の結果を参照することにより、遂に3, 4も大きな成果が得られた。

まず、一般の(実効的に並進対称な)純粋状態について指標  $p$  を計算する方法を開発し、Variance-Covariance Method (VCM)と名付けた [7]。そして、この方法をまず、強磁性体にマグノンがマクロに励起された状態に適用し、以下のことを示した [7]：

- (i) 同じ濃度のマグノンを励起しても、どんな一体状態たちに励起するかで、 $p$  の値は大きく変わる。
- (ii) 2地点エンタングルメントが最大なのにマクロエンタングルメントがない状態とか、2地点エンタングルメントが小さいのにマクロエンタングルメントがある状態が見つかった。つまり、エンタングルメントの大小は、どんな種類のエンタングルメントを見るかで全く異なる。

次に、多体の量子カオス系のエネルギー固有状態の  $p$  を計算した [8]。それまでは、量子カオス状態はエンタングルメントが大きくてノイズに対して脆弱であろうと想像されていたが、そうではないことが判った。即ち、2地点エンタングルメントは最大に近いがマクロエンタングルメントはなく、従って文献 [5]の一般論(上記)から、ノイズに対して格別に脆弱ということはあり得ないことが判った。また、多地点相関についても多くのことが判った。

続いて、量子計算機の  $p$  を計算した [9]。構造のある問題の代表としては Shor の因数分解アルゴリズムを、構造のない問題の代表としては Grover の量子探索アルゴリズムを選んだ。その結果、どちらについても我々の予想が真であることが判った。また、両アルゴリズムについて、各ステップにおいてどんな物理量がマクロに揺らいでいるか( $p=2$  をもたらすか)を明らかにした。今までに、量子計算のスピードアップのためには、2地点エンタングルメントも十分な量だけ必要であることが示されていたが、それは必要条件ではなく、十分条件である。 $p=2$  の状態を使うことも、必要条件であって十分条件ではない。これらを含む必要条件をいくつも明らかにしてゆくことによって、やがては、必要十分条件に近いものが知れるようになると期待できる。

さらに、(実効的に並進対称な)混合状態について、それがマクロにエンタングルしているか(マクロに異なる重ね合わせ状態を含んでいると言えるか)否かを判定する新しい指標  $q$  を

提案し、それがきわめて自然な指標になっていることを示した [10]。(定義するだけなら何でもいわけだから、自然な指標になっていることが重要)これにより、

(i) 量子計算機の解析に少しでも現実味を加味すると混合状態になってしまうが、それがマクロにエンタングルしているかどうか判定できるようになった。

(ii) マクロにエンタングルした状態を実験的に検出するには何を測ればよいのかが明らかになった。

(iii) 純粋状態の指標  $p$  は2局所点相関の総和だが、なぜ2局所点相関で全体のエンタングルメントについて強いことが言えたのかが明らかになった。つまり、 $q$  の方は多局所点相関であるから全体のエンタングルメントについて強いことが言えるが、実は、純粋状態に限れば  $p=2$  が  $q=2$  を意味することが判り、「純粋状態である」という情報があれば、2局所点相関から多局所点相関について強いことが言えたのであった。

そして、この成果をすぐさま量子計算機に応用した。量子計算機の実装法として、一方向量子計算という実装法が有力視されているが、その場合にもマクロにエンタングルした状態が現れるかどうかは、混合状態のマクロエンタングルメントを調べる必要があった。それは上記の  $q$  で調べられる。そうして調べて見たところ、やはりマクロにエンタングルした状態が、今度は混合状態として、現れることが判った [11]。

また、今までに述べたような系に現れる「マクロにエンタングルした状態」というのは、いわゆる「シュレディンガーの猫状態」のような単純な状態ではなく、非常に多くのマクロに異なる状態の重ね合わせになっていることが多い。それを判りやすく可視化する方法が望まれる。そこで、測定の解像度を落とせば非可換な物理量も同時確率分布を持つようになることに着眼し、可視化する方法を開発した [12]。それによって Grover の量子探索アルゴリズムの途中に現れる状態を可視化したものを下図に示す。

さらに、量子計算機ではなく、短距離相互作用しかもたない自然なハミルトニアンによる時間発展で、多項式時間でマクロにエンタングルした状態がつかれるかどうかを調べ、それが可能であることを示した [13]。

また、量子情報理論においては測定理論が重要な役割を演じることが多いが、量子ゼノ効果という測定理論の典型的な舞台に、現代的な測定理論を適用し、従来の安易な測定理論の結論とは全く違う結論が得られることを示した [14]。これに関連する仕事は、権威ある総合報告誌である Physics Reports 誌の招待総合報告になった [15]。特に、この総合報告の第4節は、量子ゼノ効果に限定しない、現代的な測定理論の総合報告になっているので、これから現代的な測定理論を研究に使う人にとっても役立つのではないかと思う。

以上についての参考文献：

- [1] M.A. Nielsen and I.L. Chuang, Quantum Computation and Quantum Information (Cambridge University Press, 2000).
- [2] 清水明, 第4回量子効果等の物理現象シンポジウム (December 20–21, 2000, Tokyo) 口頭発表; 清水明, 第56回日本物理学会(2001) 28pYN–6.
- [3] E. Schroedinger, Naturwissenschaften 23 (1935) 807, 823, 844.
- [4] 高木伸「巨視的トンネル現象」(岩波書店)など。
- [5] A. Shimizu and T. Miyadera, Phys. Rev. Lett. 89 (2002) 270403.
- [6] A. Ukena and A. Shimizu, Phys. Rev. A 69, 022301 (2004).
- [7] T. Morimae, A. Sugita and A. Shimizu, Phys. Rev. A 71 (2005) 032317.
- [8] A. Sugita and A. Shimizu, J. Phys. Soc. Jpn. 74 (2005) 1883.
- [9] A. Ukena and A. Shimizu, quant-ph/0505057.
- [10] A. Shimizu and T. Morimae, Phys. Rev. Lett. 95 (2005) 090401.
- [11] Y. Matsuzaki and A. Shimizu, in preparation.
- [12] T. Morimae and A. Shimizu, Phys. Rev. A 74 (2006) 052111.
- [13] T. Morimae and A. Shimizu, in preparation.
- [14] K. Koshino and A. Shimizu, Phys. Rev. Lett. 92 (2004) 030401.

- [15] K. Koshino and A. Shimizu, *Physics Reports* 412 (2005) 191–275.  
[16] A. Shimizu, *Statistical Physics* (eds. M. Tokuyama and H. E. Stanley, American Institute of Physics, 2000), 611–620.

## 5 自己評価:

研究成果の中には、発足時の目標を達成した部分と、発足時にはなかった新たな研究課題が浮かび上がってきてそれをクリアした部分もある。

まず達成した部分であるが、「量子計算のスピードアップにはマクロに異なる重ね合わせ(マクロエンタングルメント)を使うことが必要ではないか」という予想について、それが正しいことを強く示唆する結果が得られた。他のグループも別の必要条件を得ているが、それらは2地点エンタングルメントに関するものであり、我々のマクロエンタングルメントとは質的に全く異なるものである。異なる必要条件たちの共通部分が、より強い(核心に迫る)必要条件であるから、他のグループとは質的に全く異なる必要条件を得ることができたことは、大きな成果だと考えている。

また、量子計算中に現れる状態のマクロエンタングルメントの特徴を抽出する系統的な手法である Variance-Covariance Method を発見でき、それによって状態の特徴付けが出来た。A. Shimizu and T. Miyadera, *Phys. Rev. Lett.* 89 (2002) 270403 により、この特徴付けがそのまま、「どの状態がどんなノイズに弱いか」という問いかけの答えになっている。しかし、そこから何かもう一歩進んだことが言えたかという点、それはできなかったのも、それが不満点である。

一方、発足時にはなかった新たな研究課題については、混合状態へのマクロエンタングルメントの拡張をはじめ、予想よりも大きな成果を得ることができた。

以上を総合すると、十分な成果を得ることができたと言って良いと思う。

## 6 研究総括の見解:

大きな量子計算の速さに、「マクロにエンタングルした状態」が重要な役割をすると予想してはじめ、ほぼそれを実証した研究です。量子多体系との類推から、その判定をする指標を導入しシミュレーションを含む具体的に説得力ある議論を展開しました。

一般的な証明までには至っていませんが、量子計算の速さを理解するための重要な知見であると考えます。何よりも、この研究の基本的なアイデアが日本発である点を高く評価します。この日本発の研究を勇気を持って採択したことは成功だったと思います。

## 7 主な論文等:

論文: 7件

A. Shimizu and T. Morimae, Detection of Macroscopic Entanglement by Correlation of Local Observables, *Phys. Rev. Lett.* 95 (2005) 090401.

K. Koshino and A. Shimizu, Quantum Zeno Effect by General Measurements, *Physics Reports* 412 (2005) 191–275 (invited review paper).

A. Sugita and A. Shimizu, Correlations of observables in chaotic states of macroscopic quantum systems, *J. Phys. Soc. Jpn.* 74 (2005) 1883.

T. Morimae and A. Shimizu, Visualization of superposition of macroscopically distinct states, *Phys. Rev. A* 74 (2006) 052111.

K. Koshino and A. Shimizu, Quantum Zeno Effect for Exponentially Decaying Systems, Phys. Rev. Lett. 92 (2004) 030401.

特許:なし

受賞:なし

招待講演:2 件

Akira Shimizu, Quantum Zeno effect by general measurements, 36th Winter Colloquium on The Physics of Quantum Electronics (Snowbird, Utah, USA, January 2-6, 2006).

Akira Shimizu, マクロにエンタングルした状態 s, International Conference on Quantum Information — mathematical, physical engineering and industrial aspects (Tokyo, 1-3, November, 2003).